

F'S PEOPLE エフズピープル

Factoryが注目する人々

The dream is surely fulfilled and obtained.

毎回、様々なジャンルから、北海道で活躍する方をゲストに招き、その生き方や考え方、ライフスタイルなどについてインタビュー。旬な人の、自分らしい生き方、輝きのヒントをご紹介します。

フラワーデザイナー
サカザキ リョウさん



フラワーデザイナー
サカザキ リョウ

1973年12月1日、札幌生まれの31才。花の手入れと庭いじりが大好きな両親の元で育つ。フライトアテンダントを目指し、藤女子大学へ進学するも「何をするにも役立つ、営業の仕事を経験したい」と卒業後、日用品卸商社に就職。2年間の勤務で営業のノウハウを学ぶとともに、物を選ぶ目が養われ仕事の面白さに開眼。現在「グリーンネックレス」代表として、ブーケを主力としたブライダルフラワーのデザインほか、無店舗での花束、アレンジメントの制作&販売、フラワーアレンジメント講師、CM・広告などのフラワースタ일리ストとして活躍。また地元・北海道発、札幌発にこだわったオリジナルの引き出物の商品開発にも、力を入れている。

グリーンネックレス

〒060-0063

札幌市中央区南3条西8丁目2-1 エルミタージュ2F

TEL&FAX 011-281-8717

E-mail: info@green-n.com

HP: http://www.green-n.com

花嫁に愛されるカリスマの素顔

札幌市中心部のビルの1室に構える、アトリエ「グリーンネックレス」。ここに、北海道の花嫁たちから絶大な支持を受ける、一人の女性がいる。彼女の名前は“サカザキリョウ”。美しいだけでなく、持つ人の魅力を最大限に輝かせる、世界に一つしかないオリジナルブーケの作り手だ。

女性を惹きつけてやまない彼女のブーケ作りは、花嫁と直接、何度も話すところから始まる。好み、持っている個性、着るドレス、会場などを頭にインプットし、その全てと調和する“最もその人らしい”ブーケを作る。

ブーケ制作は主に深夜。朝は市場で花の仕入れ、日中は打ち合わせやお客様の衣裳合わせの立ち会い、夜はアトリエでフラワーアレンジ教室の講師…という多忙ぶり。仕事のスイッチをoffにする時間は、ほんのわずか。

「忙しくても、掃除だけはマメにしています。部屋が荒れると、心までずさんでいくような気がして。小物やインテリア、そして花のある空間。大好きなものに囲まれていると、いいイメージやパワーが湧いてくるんです」

“目の前の仕事を精一杯、きっちりこなす事だけを心がけてきた”と振り返るサカザキさん。花の知識も人脈もないゼロの状態から、ブーケデザイナーとしての活躍を手に入れるまで、どんな道を歩んできたのだろうか？

一瞬でブーケに恋して

卸商社の営業マンを経て、専退社。自身の挙式の準備の際に初めて、「ブライダルブーケをオリジナルで作る仕事がある」という事を知り、のちに、自らの生き方を変えることになるブーケに“恋”をしてしまった。

「それまでの人生で、ブーケについて考えたことは一度もなかったんですが(笑)、友人から“素敵な先生がいるよ”と紹介されて。作品を見たとき初めてなのに“あっ、コレだ!”と探していたものを見つけたような、不思議な感じがありました」

そして、その素敵な女性こそ、幼い頃からサカザキさんがそっと胸にしまっていた「モノ作りを仕事にしたい」という“夢の扉”の鍵の持ち主だった。大人になるにつれて、誰もが封印してしまう扉が、音を立てて開き始める…。

「式の翌月には、もう師匠の元に通い始めていました(笑)。今思えばブーケと、その先生に一目惚れしたんですね。当時50代でしたが、揺るぎない自分のスタイルを持って、内側から滲むような美しさがあって。仕事るときは一



生徒さんは初心者からプロを目指す人まで様々。アトリエのピンクの漆喰の壁は自分の手で塗ったもの



イメージに最も近い仕上がりを目指し、日々勉強。写真は生花の質感を出したいと、プリザーブドフラワーではなく、白薔薇に青い水を吸わせて作ったブーケ



花嫁の幸せを祈りながら、ひとつひとつ心を込めて作るブライダルブーケ

切、生活感を出さない。

先生を見て、夢を売るフラワーデザイナーへの憧れは募るばかり。でも全くの素人からのスタートで、最初は全然うまくいかなかった。自分の能力に愕然として、落ち込みましたよ～。それでも「やめよう」とか「向いてない」とは、考えなかったですね」

もともと天才肌ではない。だからささいな事にも時間をかけて、自分を甘やかさないようにしてきた。友人から声がかかれば、徹夜でも喜んでブーケを作り、3年間の修業期間に作った数だけ、人の輪はいつしか大きくなっていった。

2000年4月、フラワーデザイナー・サカザキリョウの誕生。

苦しさの後には必ず波が来る

しかし、フリーになると言っても、手の中にあっただのは、フラワーデザイナーという肩書きを入れた、真新しい名刺だけ。花材や道具は自宅の一室に置き、特別な看板も何もない、ひっそりとしたデビューだった。

「プロです！と、始めてみたものの仕事がない。それまでの付き合いで、ちらほら声が掛かって、食べていけるメドは全く立たない。一体、これはいつビジネススペースにのるんだらう？と、仕事のないツラさ、不安、焦りは常にありました」

仕事で得たモノは計り知れないが、失うものも少なくない。真正面からぶつかり、傷つく事だってしょっちゅう。プロとして、時には泣きたい気持ちをこらえ、あえて厳しい役割を自分に課す場面だってある。

迷っていた。「何のために花を作るのか？」。

そんな、もどかしい思いを抱えていたとき、思わぬ転機が訪れる。

「大手ブライダル雑誌のドレスページで、2年間、ブーケ制作を担当させてもらえることになって。もう嬉しくて嬉しくて(笑)。私にとってこのチャンスは、現在のビジネスのペースや進む方向を見つける事ができた、貴重な2年間でした」

撮影の現場を経験し、花だけでは成り立たない「花嫁のために存在する」ブーケの魅力に、改めて気付かされる。自身の原点でもあるブライダルブーケ。そこにこそ、自分が花を作る意味や、やり甲斐があるのではないかと。

「ブーケはレンタルや既製品が当たり前、という時代でした。「世界で一つのオリジナルを作る」という、他ができない事を私がやろう！と。同じものは二度と作らないので、私にとっても一生に一個のブーケ。だから、いつも真剣勝負です。

花の命を最高のブーケとして蘇らせて、一生の大切な瞬間に、花嫁の100%の笑顔を見ることが出来る。それがこの仕事の最大の魅力。作る事の喜びより、もっと大きいのは、自分が作ったブーケを喜んでくれる人がいるということに尽きます」

ただ一つ信じてきたモットー。それは「自分がされて嬉しい仕事をする」こと。右も左もわからない中で、前だけを見て突っ走ったフリーの3年間。積み重ねた日々が栄養となり、2003年にはアトリエを持つという新たな夢が開いた。

「これからもたくさんの出会いを重ねていきたい。その入口としてフラワーショップを開くとか、もっともっと現場で腕を磨きたいとか、描いている夢はいっぱい！ママになっても、おばあちゃんになっても、一生働き続けていきたいですね」。